

# 中国語母語話者における日本語の反使役化動詞と脱使役化動詞の使用に関する研究

A Study on the Use of Japanese Anticausativized Verbs and Decausativized Verbs by Native Chinese Speakers

劉 思柔\*

LIU, Sirou

**要旨** 本稿はアンケート調査を通じて、自他動詞派生と意味構造の観点から日本語学習者の自他交替動詞の習得について分析・考察を行った。調査内容は中国語母語話者に日本語の反使役化操作と脱使役化操作を適切に適用できるかどうかを確かめるものである。その結果、中級者は反使役化と脱使役化を適切に適用できないが、自他交替動詞の習得は可能であることが明らかになった。一方、上級者は脱使役化を適切に適用できるが、反使役化の習得は脱使役化より難しいこともわかった。また、中級者に母語の影響は見られないが、上級者には母語の正の転移が見られる。上級者は中国語にも存在する脱使役化を適切に適用できることから、日本語レベルの向上にともなって母語の正の影響があらわれ、脱使役化を適切に適用できる可能性がある。最後に、中国語母語話者における自他交替動詞の難易度、特に反使役自動詞と脱使役自動詞のそれぞれの習得難易度をさらに明確にはかるためには、動詞の活用形とヴォイスなどに対するより精緻な分析が必要だと考える。

## 1. はじめに

日本語は、動詞の形成を同一の語根のもとにさまざまな語尾変化に頼って行っている。言い換えれば、日本語では、自動詞と他動詞に関して、形態的な対立点に注目する。一方、中国語の動詞には、英語と同様に、動詞の自他の形態的区別はない、同じ形態で自動詞としても他動詞としても使われる。このため、中国語母語話者にとって、日本語の自動詞、他動詞の使い分けの習得は難しい。くわえて、日中両言語に対応する自他動詞の項構造と意味構造にも差異が存在する可能性がある。したがって、中国語母語話者の日本語の自他交替動詞の習得の難しさを解明するにはその形態を中心に分析するだけでなく、自他動詞の派生と意味構造の観点からも検討する必要がある。本稿では、動詞の意味構造の観点から、中国語母語話者が反使役化と脱使役化という操作を意識できるかどうかについてのアンケートを実施し、その調査結果を分析する。

本稿の構成は次のとおりである。第2節では、主に日本語と中国語の自他交替動詞の反使役化と脱使役化について説明する。第3節では、自他交替動詞に関する先行研究を整理し、その問題点を指摘する。第4節では、アンケート調査の目的、被験者、調査内容などを示したうえで、調査結果を分析する。第5節では、分析結果を踏まえて、中国語母語話者が反使役化と脱使役化の操作を適切に適用できるかどうかについて論じる。第6節で、本稿の結論と今後の展望を述べる。

---

\* 千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程

## 2. 日本語と中国語の自他交替

英語では同じ動詞が自動詞にも他動詞にも使えることを「自他交替」という。自他交替を起こす動詞は、共通の意味を持ち、統語の変化に応じて、主語あるいは目的語に対しての関係を変える(澤田1994)。また、望月(2003)によると、日本語では起動を表す自動詞と使役を表す他動詞が交替する現象は「使役起動交替」と呼ばれる。「使役起動交替」は、「自他交替」と同じように「形態的に関連する有対自他動詞」であるため、本稿では「自他交替」と「使役起動交替」を同様の現象として扱う。例えば、例文(1a)および(1b)のbrokeは共通の意味をもつ。ただし、他動詞文の(1a)においてthe vaseは目的語として機能する一方、自動詞文の(1b)では主語の役割を果たす。(1a)と(1b)の動詞には自他の違いがあるものの、「花瓶が壊れる」という意味は共通する。

- (1) a. The boy broke the vase. 「他動詞」  
 b. The vase broke. 「自動詞」

日本語の自他交替は、自動詞や他動詞を形成する接辞によって形態が異なるものが多い。

- (2) a. 太郎がグラスを割った。 「他動詞」  
 b. グラスが割れた。 「自動詞」

日本語にも同形のまま自他両方とも使える動詞もあるが、数は少ない。

- (3) a. 有毒ガスを発生する。 「他動詞」  
 b. 有毒ガスが発生する。 「自動詞」  
 (4) a. ドアを開く / 閉じる。 「他動詞」  
 b. ドアが開く / 閉じる。 「自動詞」

中国語動詞の自他交替にも、自動詞と他動詞が同形のものもある(ただし、日本語の方が中国語より自他同形が多いように見える)。例えば、「开 kai」(開く)がある。

- (5) a. 开 门 「他動詞」      b. 门 开 「自動詞」  
 ドアを開く                      ドアが開く

中国語は、基本的に他の動詞と組み合わせて自他交替を表す。例えば、「坏 huai」、「切 qie」などがある(李2008)。

- (6) a. 自行车 坏 了。 「自動詞」  
 自転車が壊れた。  
 b. 小孩 弄坏 了 自行车。 「他動詞」  
 子供が自転車を壊した。

望月(2003: 237)

望月 (2003) によると、(6) の「坏 huai」は現代中国語では、自動詞用法しかなく、抽象的動作が表す「弄 nong」を前につけ、「弄坏」となる。つまり、複合動詞化して、他動詞の機能を表す。

望月 (2003) は、中国語の自他交替を起こす大部分の動詞に関して、次のように述べている。

「Action+Resultative State」というスキーマによって構成された複合動詞でなければならないという特徴がある。「弄」はこのスキーマの Action を抽象的に表す軽動詞の一種で、このスキーマに適合する複合動詞を形成する上で、生産性が高い。例えば、「弄脏 (汚す)」「弄断 (断つ)」「弄错 (間違う)」「弄糟 (台無しにする)」など、後項に形容詞または自動詞を伴って、他動詞を生産的に作ることができる<sup>1)</sup>。

このために中国語の単音節動詞は、「开 kai 開く」「关 guan 閉じる」などを除き、自他交替が起こりにくい。複合動詞化すると、非常に柔軟な自他交替が起こる。

## 2.1 日本語と中国語の自動詞化

申 (2009) によると、動詞の自動詞化には2種類ある。第1類は「状態変化を被る対象物の内在的特性により、自律的な状態変化が進んでいくという事象の場合に起こる自動詞化」で、第2類は「自律的な状態変化が関与しない状態変化使役状態事象において、意味的には存在する動作主を統語構造に表さず、状態変化を被る対象物が主語となる自動詞化」である。第1類と第2類の自動詞化は、影山 (1996) の「反使役化」と「脱使役化」の操作と同じプロセスとそれぞれみなすことができる。次の節では、影山 (1996) の自動詞化について説明する。

### 2.1.1 反使役化と脱使役化

影山 (1996) は、英語の非対格動詞と能格動詞 (同じ形で自動詞にも他動詞にも使用可能な動詞) の意味構造の違いを明らかにするために、能格動詞における反使役化という考え方を提案している。能格自動詞は反使役化の操作によって意味的な使役化構造から派生する。

- (7) a. John opened the door.  
b. The door opened.

(7b) の自動詞用法では、「door」は他力ではなく、自力で「open」の状態になる。よって、ドアは変化対象であり、使役主の働きも担当する。影山 (1996) は、反使役化という操作は以下の (8) の概念構造で表わすことができる、と主張する。

- (8) 概念構造における反使役化  
[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

<sup>1)</sup> 望月 (2003 : 237)

→ [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

影山 (1996 : 145)

反使役化の操作は、使役主が束縛を受けて、変化対象物と同定され、変化対象が自ら変化するというのである。そして「束縛を受けた使役主は対象物と同一物であることが意味構造で保証されるから、統語構造には現れない」ともいう (影山1996 : 145)。

影山 (1996) は、接尾辞を持たない英語の状態変化を表す能格自動詞について、使役構造から反使役化を通じて派生されるが、明示的な動詞接辞を持つ日本語の自動詞と他動詞の対応関係は英語より複雑な状況にあるため、反使役化だけで日本語の自他交替を分析できないと述べる。そのため、他動詞から自動詞への脱使役化という操作を提案する。脱使役化の概念構造は (10) のようになる。

- (9) a. 彼は大金を儲けた。
- b. 大金が儲かった。

(10) 概念構造における脱使役化

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]  
 [x → CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]  
 ↓  
 ∅

影山 (1996 : 188)

影山 (2001) によると、脱使役化は「被る-被れる」のような反使役化とは別の操作である。反使役化では行為者を必ずしも含意しないが、(9b) のような自動詞用法においては意味的に含意する行為者が統語構造には現れないのである。つまり、反使役化においては動作主が消えるが、脱使役化においては動作主が意味的には存在するということである。英語では、反使役化しか起こらず、脱使役化は起こらない。それに対して、日本語には両方起こり得る。次節以降、さらに詳しく反使役化と脱使役化について説明する。

## 2.2 日本語における自動詞化

前節で述べたように、影山 (1996) は、日本語の自動詞化に対して二つの操作を提案した。つまり、使役主と変化対象物を同一のものとする「反使役化」と、使役主を意味構造で抑制し、統語構造に投射しない「脱使役化」という二つの操作である。影山 (1996 : 183-194) は、他動詞から自動詞への派生する-e-と-ar-のような自動詞化接辞の意味を考察すると、両者の働きが異なることを指摘している。

- (11) 他動詞 + -e- → 自動詞 : 「反使役化」自動詞化接辞 -e- は、使役主を変化対象と同定することで自動詞化する。

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]  
 → [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

- (12) 他動詞 + -ar- → 自動詞 : 「脱使役化」自動詞化接辞 -ar- は、使役主を意味構造

で抑制し統語構造に投射しないことで自動詞化を行う。

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]  
 [x → CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]  
 ↓  
 ∅

[-e-] 自動詞は、英語の能格動詞と同様に、使役主と変化対象を同定して、反使役化という操作によって派生する動詞と見なされる。これらの自動詞は、(13)のように、動作主がないことを意味する副詞「勝手に」と共起するだけでなく、(14)の命令文にも現れる。

- (13) 取っ手が勝手に取れた。  
 紙が勝手に破れた。  
 ページが勝手にめくれた。

影山 (1996 : 189)

- (14) ロープよ、切れないでくれ！  
 しみよ、きれいに取れてくれ！  
 ひもよ、ほどけるな！

影山 (1996 : 190)

また、[-e-] 自動詞は、(15)のような動作主の動作様態や手段を表す表現を付けると不自然になる。

- (15) \*? 左手を使って、ページがめくれた。  
 \*? ドイツ製のはさみで、布がていねいに切れる。  
 \*? ペンチでつかんで、ネジが外れた。

影山 (1996 : 190)

例文 (15) においては、後半の自動詞文はそれぞれの対象物が状態変化を司っているの  
 で、「左手を使って」のような動作主に関わる表現を付けると不自然になる。

以上の文から見ると、[-e-] 概念構造では、使役主と変化対象は同じ働きを持つとみなすことができる。そして、形式面については影山 (1996 : 190) が、「[-e-] は」内項と同一指示を外項に与え、それによって、外項を抑制するということである。外項が抑制されると、内項だけが統語構造にリンクされるので、統語的には、-e-自動詞は非対格動詞となる」と述べている。

[-ar-] による脱使役化操作によって派生される自動詞は、意味的には動作主をもつ。例文 (16) の「木が植わる」、「目標額が集まる」などの自動詞は、誰かが木を植える、お金を集めるという行為がないと「木が植わっていた」、「目標額が集まった」という結果事態にならないため、これらの自動詞は使役主の努力の結果によってその事態が生じるという意味を含意している。また、影山 (1996 : 185) は、[-ar-] 自動詞には「難なく」や「どうしても」(例文17、18) という「使役行為から結果事態への推移が容易かどうかを述べ

る副詞]が付くことができるため、「概念構造ではCONTROLないしCAUSEを修飾]し、よって「[-ar-] 自動詞が使役構造を土台としている」と指摘する。

(16) 公園には様々な種類の木が植わっていた。

目標額が集まった。

(海底トンネルによって) イギリスとフランスがつながった。

値段はこうこれ以上まからない。

段ボール箱に雑誌がいっぱい詰まっている。

影山 (1996 : 184)

(17) (募金集めで) 難なく目標額が集まった。

(力を合わせて押すと) 鉄の扉は難なく閉まった。

(力をこめて引っ張ると) 難なく釘は抜けた。

(難しそうだったが) 難なく問題が解けた。

影山 (1996 : 185)

(18) どうしても、この木はうまく植わらない。

どうしても、目標額が集まらない。

どうしても、これ以上はまからない。

影山 (1996 : 185)

例文 (16) のような結果事態を達成するために、対象物と異なる使役主が存在するはずだが、(19) のように動作主を統語的に表示すると非文となる。それは、影山 (1996) によると、「-ar-」派生語は、語彙部門から形成されるので、動作主を意味的に含意するだけでは、統語構造に反映させることができないからである。よって、(20) が示すように、「-ar-」自動詞と「わざと」や「ていねいに」という動作主指向の副詞や「—するために」のような目的節が生起することもない。

(19) \* 市の職員によって桜の木が公園に植わった。

\* ボランティアの学生によって募金が集まった。

(20) \* わざと、壁にグロテスクな絵がかかっている。

\* プライバシーを守るために、生垣が植わっている。

\* 箱にていねいに品物が集まっている。

影山 (1996 : 187)

要するに、反使役化操作によって派生する自動詞は「勝手に」、「ひとりでに」などの副詞と共起できるが、脱使役化操作によって派生する自動詞は共起することができない。逆に、脱使役化自動詞は「手を尽くして」、「難なく」、「苦勞の末」のような副詞をつけることができるが、反使役化自動詞はつけることはできない。

### 2.3 中国語の自動詞化

中国語の反使役化については、申 (2009) が、中国語には反使役化という語彙規則は存

在しないと指摘している。申（2009）は（21）の「中国語における起動自動詞から状態変化使役他動詞への語形成のプロセス」を通じて、反使役化に相当する中国語の語彙概念構造を提示する。

- (21) a. 状態 [y BE AT-z]  
 「断 duan」(切れている状態), 「碎 sui」粉々になっている状態  
 「破 po」(割れている、壊れている状態)
- b. 起動 [(y) BECOME [y BE AT-z]] : 実現相アスペクト辞の「了 le」の付加  
 「断了 duan le」(切れる), 「碎了 sui le」(砕く), 「破了 po le」(割れる)
- c. 活動 [x ACT ON y]  
 剪 jian/ 切 qie/ 割 ge (切る)
- d. 「原因事象+結果事象」の合成による状態変化使役他動詞の形成  
 [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]
- ③単音節 ①状態 (断 / 碎 / 破 / 坏 / 倒…)  
 活動動詞  
 (剪 / 切 / 割 / 打 / 弄 / 用 / …)
- ②状態 (断 / 碎 / 破 / 坏 / 倒…) + 「了 le」
- ④「原因事象+結果事象」を表す複合動詞 (剪断 / 切断 / 割断 / 打碎 / 敲碎 / 弄破)  
 申 (2009 : 176)

(21a) は、状態を表す形容詞や非対格動詞、(21a) に実現相アスペクト辞の「了 le」を付加すると、(21b) のような起動自動詞になり、(21b) のような起動自動詞に (21c) の行動動詞が複合されると (21d) のような状態変化使役他動詞が形成され、そして、(21d) は (21b) のような起動自動詞に対応する使役他動詞であると説明している。

さらに、望月（2009）によると、中国語において、日本語の反使役化という操作によって派生した「-e」自動詞との対応は、(21b) の②形容詞や非対格動詞に実現相アスペクト辞の「了 le」を付加する表現に対応している。そして、「-e」自動詞と対応する使役他動詞は、(21c) の活動を表す他動詞の①または④の「原因事象+結果事象」の合成による状態変化使役他動詞に対応する。

申（2009）は、(21) の「中国語における起動自動詞から状態変化使役他動詞への語形成のプロセス」で示したように、中国語の語形成が「状態 (断 duan) →状態変化 (断了 duanle) →状態変化使役 (切断 qieduan)」という方向で起こると指摘する。そして、中国語の自他交替について、「中国語における使役交替における語形成が、基本の『状態述語』から使役化を経て、『状態変化使役他動詞』へと拡張していく現象は、状態や状態変化に基本的視座をおきやすい『なる』的な性質を示唆している」と述べている (申2009 : 177)。

- (22) a. 绳子自己断了。

ロープがひとりでに切れた。

b. 剪断绳子。

ロープを切る。

例文 (22) において、自動詞「切れる」は、状態を表す「断 duan」に実現相アスペクト「了 le」を付加する内在的变化を表す「断了 duanle」に対応する。申 (2009) の中国語の語形成の方向から見ると、「切れる」と対応する中国語の「断了 duanle」は「状態形容詞」から「起動自動詞」の過程で形成される。

例文 (22b) においては、結果状態事象を表す「断 duan」と原因活動事象を表す「剪 jian」が複合化して「剪断 jianduan」といった結果複合動詞になっており、日本語他動詞の「切る」は、その外的状態変化を表す「剪断 jianduan」に相当する。例文 (22b) のように、中国語の「剪/切/割」などの動作動詞は、「剪 jian」が外的動作主を含んでいるため、使役主を変化対象と同定することができない。このために、反使役化を起こすことができない。そして、望月 (2003 : 245) は、「結果性・完結性も含まない、反使役化というより結果状態をそのまま表す別の語である形容詞または自動詞を用いることによって、反使役化と同じ効果をえている」と述べている。

したがって、中国語の語形成には「状態形容詞 (断 duan) → 起動自動詞 (断了 duanle) → 状態変化使役 (切断 qieduan)」というプロセスがあるといえる。言い換えると、このプロセスは使役化の過程とも言える。つまり、日本語のように内在状態の変化を表すための反使役化によって他動詞「使役」から自動詞「起動」への派生がない。

上で述べたように、脱使役化によって派生する自動詞は外的要因で、対象の変化が起こるため、そのような自動詞の使役主を意味的に含意する行為者は統語構造に投射することはない。さらに、脱使役化について、影山 (1996 : 188-189) は「英語には反使役化はあるが、脱使役化は起こらない。これは、英語の自動詞化が形のないゼロ形態によって行われていることに起因する。ゼロ形態は、せいぜい反使役化の力しか持っていない」と述べている。

中国語は英語と同じように接辞がないため、中国語も英語と同様に脱使役化が起こらないと考えられる。しかし、李 (2008 : 19) は「中国語の自他交替現象を考えると、脱使役化が起こるかどうかは必ずしも自他を区別する接辞の有無といった形態的な要因のみによるものではない。中国語は動詞に自他を区別する形態がない点では、英語と同様である。それにはにもかかわらず、動詞が形態を変えずに脱使役化を起こす例は少なくない。」と述べ、中国語における脱使役化の存在を指摘している。

(23) a. 我打破了一个杯子。

私はコップを壊した。

b. 杯子打破了。

コップは壊れた。

申 (2009 : 159)

(24) a. 雨水淋湿了衣服。

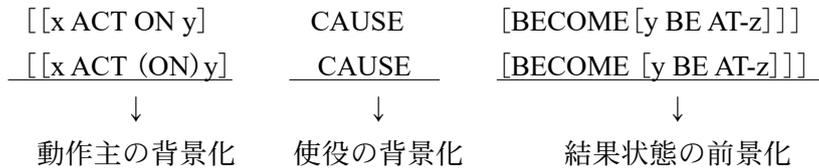
雨が降って服を濡らしてしまった。

- b. 衣服都淋湿了。  
服は全部雨に降られて濡れてしまった。
- (25) a. 他把这幅画挂斜了。  
彼はこの絵を斜めにかけてしまった。
- b. 这幅画挂斜了。  
この絵が斜めにかかっている。

申 (2009 : 182)

例文 (23)、(24)、(25) における各aは他動詞文、bはそれに対応する自動詞文である。それぞれの例文bでは変化が起こる対象は主語で、動詞の動作主は意味的には存在するが、統語構造には反映されていない。つまり、日本語と同じように、脱使役化が起こっているといえる。

望月 (2009 : 281) は、以下の中国語の脱使役化のプロセスを提案している。



望月 (2009) によると、中国語の脱使役化のプロセスは、結果表現を活動動詞に付け加えることによって結果性が前景化し、それと同時に動作主と使役が背景化し、当該動詞を含む文は自動詞構文として機能することになる。つまり、中国語の脱使役化は「結果述語の付加→結果事象の前景化 →動作主の抑制→ 脱使役化→ 自動詞構文」の順序で起こっているといえる。

- (26) a. 她哭湿了手帕。  
彼女はハンカチを泣き濡らした。
- b. 手帕哭湿了。  
ハンカチは涙で濡れた。

- (27)
- |   |   |
|---|---|
| 哭 : [x ACT]                               |   |
| 哭   |   |
| 湿 : [BECOME [y BE AT-z]]                  |   |
| 湿   |   |
| 哭湿 : [[x ACT] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]] |   |
| ↓ 哭                                       | 湿 |
| ∅ (脱使役化)                                  |   |

望月 (2003 : 250)

「哭湿 kushi」(涙で濡れた) は、(27) の語彙概念構造によって、他動詞複合動詞を派生

し、脱使役化を経て、動作主の行為「哭 ku」は背景化され、「湿 shi」という結果事象は前景化をした上で、自動詞用法が派生する。

申（2009）は、中国語の脱使役化が起こる複合動詞は「前項の行為が後項結果状態を目的としていない」という特徴があると指摘している。また、例文（23）～（25）に現れる結果複合動詞は、全部前項が後項の結果状態を達成するために動くのではなく、前項の動作が偶発的に後項の結果状態に到達するという事象構造である。例えば、例文（25）「挂斜 guaxie」（斜めにかける）の前項である「挂 gua」（かける）は、後項である「斜 xie」（斜める）という結果に達成するために働くのではなく、偶発的に「斜め」の状態に達成したのである。「挂 gua」（かける）という動作は必ずしも「斜 xie」（斜める）という状態を引き起こすわけではない。

そして、申（2009）は、前項が後項の結果状態を達成するという目的で活動する場合、前項には後項の結果状態を示すことを意図した高い他動性があるため、動作主と使役は背景化し、結果性が前景化すると同時に、状態変化の対象物が主語になるという脱使役化が許されない、例文（28b）、（29b）のように「被 bei」という統語的な受け身標識を使わないと文法的に成立しないと指摘している。例えば、例文（29）の「敲醒 qiaoxing」（叩き起こす）の前項「敲 qiao」（叩き）は、後項「醒 xing」（起こす）という結果状態を達成するために動作する。「敲 qiao」（叩き）という動作は他動性が高いため、脱使役化は起こらず。「被敲醒」の「被 bei」という受身標識を付けなければならない。

- (28) a. 他拉住了我。  
彼は私を引っ張ってひきとめた。  
b. \*我拉住了。  
我（被他）拉住了。  
私は彼に腕をとられてひきとめられた。
- (29) a. 他用力敲门、敲醒了我。  
彼は力いっぱいドアを叩き、私を叩き起こした。  
b. \*我敲醒了。  
我（被他）敲醒了。  
私は彼にドアを叩かれて起こされた。

また、動詞の前項の原因事象が特定されていない場合、脱使役化が起こりやすい。例えば、例文（30）「打开 dakei」（開ける）の前項「打 da」は、動作主、様態、動作の手段などが未指定でない「何らかの力を加える」という抽象的な動作だけを表すため、動作主と使役が背景化して脱使役化起こすことができる。一方、例文（31）「推开 tuikai」（押し開ける）の前項である「推 tui」は、具体的様態や動作の手段を含意するため、脱使役化は起こらない。

- (30) a. 他打开了那扇门。  
彼はあのドアを開けた。  
b. 那扇门打开了。

- ドアは開いた。
- (31) a. 他推开了那扇门。  
彼はあのドアを押し開いた。
- b. \*那扇门推开了。  
(ドアは押し開いた)

申 (2009 : 182)

動詞の自動詞化について、前述したように日本語においては反使役化と脱使役化二つの操作がある。一方、英語においては反使役化を通じて使役構造から自動詞を導くことしかできない。他方、中国語においては自他交替を起こす動詞が主に複合動詞で、それらは「状態→起動→状態変化」という使役化のプロセスによって派生するため、反使役化が存在しないことが確認できた。各言語の自動詞化を表1にまとめる(影山2021:104参照)。

表1 各言語の自動詞化

自動詞化 (項の減少)	日本語	中国語	英語
反使役化	+	-	+
脱使役化	+	+	-

(+ : 存在する ; - : 存在しない)

### 3. 先行研究とその問題点

日本語の自他動詞の習得に関する研究は少なくない。従来の研究は、日本語学の動詞の形態の観点から、自他対応する動詞(有対自他動詞)の習得を中心にきた。しかし、中国語母語話者について、自他交替動詞の習得を自他動詞の派生と意味構造の観点から分析した先行研究は非常に少ない。とりわけ、中国語母語話者が反使役化操作と脱使役化操作を適切に適用できるかどうかを検証した研究は管見の限り未だ発表されていない。

#### 3.1 先行研究

伊藤(2012)は、KYコーパスを利用して、日本語を学習する中級から超級までの中国語母語話者25名を研究対象に、誤用と正用から「対のある自他動詞」習得について検討を行った。具体的には、対象者の全発話の中から、対のある自他動詞を抽出し、日本語能力レベルごとに「自他動詞の習得段階の仮説」<sup>2)</sup>に基づいて分析している。そして、中級の学習者は主に自他の混同と活用の正確さに問題があり、習得段階の仮説の段階においては1から3<sup>3)</sup>のあいだに位置し、形態論の段階に溜まっていると述べている。また、上級者は、

<sup>2)</sup> 伊藤(2012)は小林・直井(1996)を参照して「自他動詞の習得段階の仮説」を立てた。習得段階に5つの段階がある、1から5になるにつれ、機能の範疇も広がると述べている。段階1(語彙を選択する)、段階2(格助詞を選択する)と段階3(正しい活用形にする)は形態論範疇に属する。段階4(文法的で意味が通じる文を作る)は意味論の範疇である。段階5(日本語として適切な表現形を選ぶ)は語用論の範疇に属する。この仮説は、「自他動詞の習得は文法的正確さなどの言語構造重視の段階から、社会の言語的な適切さ重視へと発展していく」と仮定されている。

<sup>3)</sup> 形態論範疇:段階1(語彙を選択する)、段階2(格助詞を選択する)と段階3(正しい活用形にする)

様々な語彙を使用して会話を行うことができるが、自他の誤用や語彙の選択においてやや正確さ、自然さに欠ける発話が見られた。また、上級者から超級者となるのに従って、徐々に「テンス」、「アスペクト」、「状態変化主体の他動詞文」、「テモラウ文」などの意味論や語用論を使用することで、表現力が豊かになり、あとは動詞使用の適切さが問題になると述べている。また、日本語教育の観点から、中級の学習者には活用形レベルなどの誤用を減らすことを目的とした指導する必要がある。上級以上においてはどのように事態を捉えるか、また、発話者においては感情、心情をどのように表すのかといった知識の育成が必要であるとも述べている。

一方、丁（2013）は、日本語中級または上級レベルに達している中国人留学生47人を被験者とし、自他動詞に関する8つの質問に選択肢形式で答えるアンケート調査を行い、その結果にもとづいて、対のある自他動詞の誤用が生じる原因とその誤用を防ぐためにどのような工夫が必要なのかについて論じている。まず、中国語は日本語のように形態的に自他動詞の区別がないため、形が似通っている対のある自他動詞が、自動詞であるのか、他動詞であるのかの基本認識がないため混同されやすく、また自動詞と他動詞の可能形の混用が見られるなどの、中国語母語話者の習得に関する問題点を述べている。

加山（2016）は、カナダの大学に在学中の4人の日本語学習者を対象に、彼らの自然発話を観察することで、実際の発話の中で自動詞と他動詞がどのように使用されているのかを調査し、その傾向を分析した。4人の日本語のレベルは中級、上級それぞれ2名ずつである。2人は母語がフィリピン語、他の2人は母語が英語である。被験者は、研究者の指示に従って、旅行・趣味・勉強・将来などの話題について話した。各被験者合計30分間の自然発話のデータは録音・文字化され、さらに発話された動詞はコードされた。分析結果によると、中級学習者と上級学習者の間に他動詞の使用が数の上で大きな違いは見られなかったが、自動詞の使用においては上級学習者の方が多様な自動詞を用いており、特に非対格動詞をより頻繁に使用していることがわかった。そして、非対格動詞の統語的構造や意味特性が影響し合って、他動詞や非能格動詞に比べて非対格動詞は習得が困難であり、学習者の言語発達過程でゆっくりと習得されていくと主張する。さらに、日本語の非対格動詞は、無生物が主語になる動詞が多いため、他の言語に比べて必ずしも一対一関係の表現方法を持つわけではないことが習得を困難とさせる一つの原因であるとも述べている。

### 3.2 問題点

伊藤（2012）と丁（2013）は、伝統的な日本語学の視点から、中国語母語話者の日本語の対のある日本語自他動詞の習得について調査・分析を行った。誤用の原因について、自他動詞の語根または接辞などの語彙的特徴から研究している。そして、丁（2013）は、母語に日本語のような接辞を持たない中国語母語話者について、日本語の自他動詞の習得が困難である要因に、母語の転移があると主張する。しかし、誤用と母語の転移を語彙的側面と形態的側面からのみ研究しており、自他動詞の派生と意味構造については触れていない。加山（2016）は、上級学習者の方が多様な自動詞を用いており、特に非対格動詞をより頻繁に使用していることから、他動詞や非能格動詞に比べて非対格動詞の習得の方が困難であると主張した。しかし、非対格動詞の習得の原因について具体的に説明していない。日本語には、自他動詞の派生のパターンは多数存在する。具体的には、他動詞から自動詞へ

の派生、自動詞（非対格動詞・非能格動詞）から他動詞への派生が見られるのである。中国語には、英語と同様に、接辞がないため、その動詞には自他の形態的な区別はなく、自他交替においては複合動詞が中心となる。そのため、日本語の自他交替の現象は、中国語より広い範囲に現れ。既に述べたように、他動詞から自動詞への派生は、日本語においては反使役化（使役主は削除され、意味的含意無し）と脱使役化（使役主は現れないが、意味的含意あり）の両方が存在するが、中国語においては脱使役化しか存在しない。さらに、両言語の意味に対応する自他動詞の項構造と意味構造の差異が存在する可能性もあるため、中国語母語話者が日本語の自他動詞を習得する際には困難が生じる推察される。したがって、本稿は、動詞の意味構造の観点から、中国語母語話者について、自他交替動詞の反使役化と脱使役化の操作を適切に適用できるかどうかを、アンケート調査とその結果の分析をとおして、中国語母語話者における日本語の自他交替動詞の習得について考察を行う。

#### 4. アンケート調査

##### 4.1 調査目的

反使役自動詞と脱使役自動詞<sup>4)</sup>の習得難易度を、自他動詞派生と意味構造の観点から分析するためには、日本語学習者に反使役化操作と脱使役化操作という意識があるかどうかを明確する必要がある。このために、中国語母語話者が反使役化操作と脱使役化操作を適切に適用できるかどうかを明確することを目的とする。

##### 4.2 仮説

日本語の他動詞から自動詞への派生には、反使役化と脱使役化といった二つの操作がある。中国語には、日本語と同様に脱使役化操作が存在するため、中国語母語話者の日本語学習者は日本語に存在するこの操作に意識することができるので比較的習得し易く、一方で、中国語には反使役化という操作がないので、この操作を適切に適用できず、習得が難しいことが予測される。

##### 4.3 被験者と調査方法

調査を、中国語母語話者の中級以上の日本語学習者155名に対して行った。被験者のうち、上級（N1）学習者は80名、中級<sup>5)</sup>（N2、N3）学習者は76名で、全員が日本語能力試験の資格を取得している。また対照群として、日本語母語話者25名も加えた。調査方法は、「問巻星」というwebを利用したオンラインアンケートである。URLを、SNS経由で被験者に送り、アンケートの問題に回答させた。

##### 4.4 アンケート内容

本調査で使用したアンケートは、フェースシート部分と質問部分の2つで構成されている。フェースシート部分には被験者の個人情報、日本語のレベル、日本語学習年数などに

<sup>4)</sup> 以下、反使役化から派生した自動詞を反使役自動詞、脱使役化から派生した自動詞を脱使役自動詞と呼ぶ。

<sup>5)</sup> 中級以上の学習者を対象とした理由は、文法性判断テストの問題の難易度から考慮して、ある程度の日本語知識がないと回答できる能力がないためである。

関する質問がある。

質問部分は文法性判断テストである。「勝手に」、「ひとりで」、「難なく」、「苦勞の末」などの副詞が付いた文を読み、その文の容認性を判断（○、×、分からない）させた。反使役動詞と脱使役動詞<sup>6)</sup>には、それぞれ12の問題文がある。さらに、反使役化と脱使役化の二つの語彙規則の適用を受ける動詞について、8問用意した。他に、問題文を8問用意し、被験者が副詞を正確に使用することができるかどうかを調べた。合計40の問題文を提示した。

問題文については、被験者に負担をかけないことを目的に、できる限り短く、わかりやすい文章を作成したい。問題文はランダムに被験者に提示した。

#### 4.5 結果とその分析

調査用の40の問題文は被験者に提示して、調査を実施した。全ての問題文とその正解は表2にまとめている。

表2 問題文・正解・文の種類<sup>7)</sup>

問題文	正解	文の種類
1. クレーンを使って、難なくその大きな木が植わった。	○	脱使役化文
2. (長期間使用したロープは) 経年劣化 (ケイネンレッカ) で難なく切れた。	×	反使役化文
3. 彼はトラブルに難なく巻 (マ) き込 (コ) まれてしまった。	×	副詞文
4. 散歩していると、靴紐 (クツヒモ) がひとりでに切れた。	○	反使役化文
5. 苦勞の末、就職先が決まった。	○	脱使役化文
6. 森の中、苦勞の末、涼しい風が流れている	×	反使役化文
7. ゴマを炒 (イ) ると、苦勞の末、いい香りが漂 (タダヨ) った。	×	副詞文
8. (机の上の) 花瓶 (カビン) が落っこちて勝手に割れた。	○	反使役化文
9. その公園には、たくさんの花がひとりでに植わっている。	×	脱使役化文
10. 水で洗った服が勝手に縮んだ。	○	反使役化文
11. 逃げていた子猫が、難なく捕まった。	○	脱使役化文
12. 私はひとりでにテレビをつけた。	×	副詞文
13. 探していた本が勝手に見つかった。	×	脱使役化文
14. 苦勞の末、お母さんのコップが割れてしまった。	×	反使役化文
15. 無人の車がひとりでに動 (ウゴ) き始めた。	○	副詞文
16. 苦勞の末、起業 (キギョウ) の初期資金がようやく集まった。	○	脱使役化文

<sup>6)</sup> 『はじめての日本語能力試験N3単語 2000』と『はじめての日本語能力試験N4単語 15000』を参照して、質問文の反・使役動詞は全部N3～N4レベルの動詞である。

<sup>7)</sup> 「2つの概念構造を持つ動詞文」を「両概念構造」として表している。

17. (家に誰もいないはずなのに) 帰ってきたらトイレの水が勝手に流れていた。	○	反使役化文
18. 有罪がひとりでに決まった。	×	脱使役化文
19. 苦勞の末、私は大学を卒業した。	○	副詞文
20. (いつもどおり帰宅して取っ手に触れると) 難なく取っ手が取れた。	×	反使役化文
21. このスーツケースには、勝手に全部の衣類が収まった。	×	脱使役化文
22. (火災訓練の間) 子供が勝手に動(ウゴ)かないようにさせてください。	○	副詞文
23. 容疑者(ヨウギシャ)がひとりでに(警察に)捕まった。	×	脱使役化文
24. 知らないうちにボタンがひとりでに取れた。	○	反使役化文
25. 風のせいで、苦勞の末ポスターが破(ヤブ)れた。	×	反使役化文
26. (いつの間にか、)紙袋が勝手に破(ヤブ)れていた。	○	反使役化文
27. この手帳はスーツのポケットに難なく収まるサイズだ。	○	脱使役化文
28. 田中は難なく父を説得して留学の許可をもらった。	○	副詞文
29. 苦勞の末、失くした財布が見つかった。	○	脱使役化文
30. マラソンで苦勞の末、一位との差が縮んだ。	×	反使役化文
31. 難なく紐(ヒモ)が解けた。	○	両概念構造
32. 私は勝手に財布を失くした。	×	副詞文
33. 勝手にパイプが詰(ツ)まった。	○	両概念構造
34. (募金集めで)勝手に目標額が集まった。	×	脱使役化文
35. 勝手に傷口が塞(フサ)がった。	○	両概念構造
36. 難なく氷が溶けた。	○	両概念構造
37. 苦勞の末、本が箱にびっしり(と)詰(ツ)まった。	○	両概念構造
38. ひとりでに紐(ヒモ)が解けた。	○	両概念構造
39. 難なく穴が塞(フサ)がった。	○	両概念構造
40. かき氷がひとりでに溶けた。	○	両概念構造

#### 4.5.1 副詞文

第2節で述べたように、反使役化は使役主と変化対象を同定するという操作であり、動作主がなくとも、変化対象そのものの性質によって変化が生じる。このため、反使役自動詞が「勝手に」、「ひとりでに」のような主語の自らの性質によって「自発的」に変化を行う副詞が共起できる。脱使役化は意味構造において使役主を抑制し、統語構造に投射しない操作である。つまり、意味的には動作主は存在するため、「難なく」、「苦勞の末」といった副詞が共起できる。このために、本調査においては、「勝手に」、「ひとりでに」、「難なく」、「苦勞の末」と共起可能かどうかという点から、反使役自動詞と脱使役自動詞を区別した。表3は、副詞文に対する正答率の結果である。

表3 副詞理解テスト

	問題番号と副詞	正答率と正答人数		中級正答率と正答人数		上級正答率と正答人数		日本語母語話者正答率と正答人数	
		%	人	%	人	%	人	%	人
副詞文	3. 難なく	69.0	107	61.3	46	76.2	61	88.0	24
	7. 苦勞の末	54.8	85	57.3	43	51.7	42	80.0	20
	12. ひとりでに	56.1	96	45.3	43	66.2	53	80.0	20
	15. ひとりでに	79.3	126	71.9	54	86.2	75	96.0	24
	19. 苦勞の末	75.4	117	72.0	54	78.7	63	84.0	21
	22. 勝手に	72.2	121	72.0	54	83.7	67	80.0	20
	28. 難なく	76.7	119	70.6	53	82.5	66	84.0	21
	32. 勝手に	83.3	130	80.0	60	87.5	70	84.0	21
	平均正答率 (%)	70.9		66.3		76.6		84.0	

副詞テストの目的は、適切な被験者を絞り込むことにある。本調査においては、8問中7問以上<sup>8)</sup>の正解を取った参加者のデータだけを有効とみなすこととした。有効な被験者合計82人の内、中級（N2、N3）の学習者は36人、上級（N1）の学習者は46人であった。

#### 4.5.2 反使役自動詞

表4は、反使役自動詞に対する正答率の結果である。

表4 反使役化文

	問題番号と自動詞	正答率と正答人数（中級と上級）		中級正答率と正答人数		上級正答率と正答人数		日本語母語話者正答率と正答人数	
		%	人	%	人	%	人	%	人
反使役化文	2. 切れる	60.9	50	55.5	20	65.2	30	80.0	20
	4. 切れる	53.6	44	55.5	20	52.1	24	88.0	22
	6. 流れる	60.9	50	52.7	17	64.3	31	92.0	23
	8. 割れる	70.7	58	66.6	24	73.9	34	84.0	21
	10. 縮む	48.7	42	44.4	16	56.5	26	60.0	15
	14. 割る	50.2	41	36.1	13	55.8	38	88.0	22

<sup>8)</sup> 日本母語話者の平均正答率が84.0%であることから、7問以上の正解を取ったデータを有効とした。

反使役 化文	17. 流れる	69.2	57	69.2	25	69.5	32	96.0	24
	20. 取れる	51.5	42	49.9	18	52.1	24	80.0	20
	24. 取れる	51.2	42	66.6	24	34.1	18	80.0	20
	25. 破れる	51.6	44	33.3	12	52.5	32	96.0	24
	26. 破れる	62.1	51	52.7	19	69.5	32	84.0	21
	30. 縮む	24.3	20	19.4	7	28.2	13	56.0	14
平均 正答率 (%)	54.5			50.3		55.1		82.0	

反使役化文は、「切れる」、「割れる」、「縮む」、「流れる」、「取れる」、「破れる」のような反使役化動詞と副詞が共起できるかどうかを判断させることを通して、中国語の母語話者が反使役化という操作を意識しているかどうかを検証するために設定した問題文である。表4の反使役化文の正答率から見ると、中級・上級の全体の正答率が54.5%で、上級の正答率は55.1%、中級の正答率は50.3%だったことがわかる。問題4の「散歩していると、靴紐（クツヒモ）がひとりでに切れた。」は、中級の正答率が55.5%、上級者の正答率が52.1%であり、問題24の「知らないうちにボタンがひとりでに取れた」は、中級の正答率が66.6%、上級の正答率は34.1%だった。つまり、この2つの問題文についていえば、中級者の正答率は上級者より高い。なお、問題30の「マラソンで苦勞の末、一位との差が縮んだ。×」の全体の正答率は24.3%で、中級者と上級者双方とも正答率が高くなく、日本語母語話者の正答率も比較的低いため、問題30は分析用データから外すこととした。

#### 4.5.3 脱使役自動詞

表5は、脱使役自動詞に対する正答率の結果である。

表5 脱使役化文

	問題番号と 自動詞	正答率と正答 人数（中級と 上級）		中級正答率と 正答人数		上級正答率と 正答人数		日本語母語 話者正答率 と正答人数	
		%	人	%	人	%	人	%	人
脱使役 化文	1. 植わる	51.2	42	52.7	19	50.0	23	92.0	23
	5. 決まる	73.1	60	69.4	25	76.0	35	100	25
	9. 植わる	65.8	54	61.1	22	69.5	32	84.0	21
	11. 捕まる	67.0	55	69.4	25	65.2	30	84.0	21
	13. 見つかる	56.0	46	41.6	15	67.3	31	84.0	21
	16. 集まる	85.3	70	80.5	29	89.1	41	92.0	23

脱使役化文	18. 決まる	59.7	49	58.3	21	60.8	20	92.0	23
	21. 収まる	62.1	51	52.7	19	69.5	32	96.0	24
	23. 捕まる	60.9	50	52.7	19	67.3	31	84.0	21
	27. 収まる	70.7	58	63.8	23	76.0	35	92.0	23
	29. 見つかる	68.2	56	66.6	24	69.5	32	92.0	23
	34. 集まる	58.5	48	44.4	16	69.5	32	80.0	20
平均正答率 (%)	64.9			59.4		69.1		89.3	

脱使役化文は、「植わる」、「決まる」、「収まる」、「見つかる」、「捕まる」、「集まる」のような脱使役化動詞と副詞が共起できるかどうかを判断させることを通して、中国語の母語話者が脱使役化という操作を意識しているかどうかを検証するために設定した問題文である。表5の脱使役化文の正答率から見ると、中級・上級全体の正答率は64.9%、上級の正答率は69.1%、中級の正答率は59.4%だった。問題1の「クレーンを使って、難なくその大きな木が植わった。」は、中級の正答率が52.7%、上級者の正答率が50.0%である。また、問題11の「11. 逃げていた子猫が、難なく捕まった。」は、中級の正答率が69.4%、上級の正答率が65.2%だった。この2つの問題文は中級者の正答率は上級者より高い。

#### 4.5.4 比較

表6 正答率と標準偏差

動詞文タイプ	正答率 (%) と標準偏差 (中級と上級)		中級正答率と標準偏差		上級正答率と標準偏差	
	正答率 (%)	標準偏差	正答率 (%)	標準偏差	正答率 (%)	標準偏差
反使役化文	57.3	7.5	52.9	11.3	58.6	10.8
脱使役化文	64.9	13.9	59.4	10.7	69.1	8.9

表6は問題文30. のデータを除いた<sup>9)</sup>、反使役化文と脱使役化文の平均正答率と、その標準偏差である。

t検定の結果から、中級者においては反使役化文の正答率と脱使役化文の正答率の間に有意差がない ( $t(21) = 1.35, p > .05$ )。一方、上級者の反使役化文の正答率と脱使役化文の正答率には統計的有意差がある ( $t(21) = 2.4, p < .05$ )。つまり、上級者の脱使役化文の正答率は反使役化文より高い。そして、反使役化文の正答率は中級者と上級者の間には有意差がない ( $t(21) = 1.18, p > .05$ )。一方、脱使役化文の正答率は中級者と上級者の間に有意差がある ( $t(21) = 2.25, p < .05$ )。つまり、脱使役化文の場合、上級者の正答率は中級者より高い。

<sup>9)</sup> 4.5.2を参照。

4.5.5 二つの概念構造を持つ動詞

表7 2つの概念構造を持つ動詞文

	問題番号	正答率 (%)	中級正答率 (%)	上級正答率 (%)
2つの概念構造を持つ動詞文	33. 詰まる	34.1	38.8	30.4
	35. 塞がる	40.2	36.1	43.4
	38. 解ける	60.9	58.3	63.0
	40. 溶ける	40.2	36.1	43.4
	37. 詰まる	48.7	55.5	43.4
	39. 塞がる	46.3	38.8	52.1
	31. 解ける	65.8	55.5	73.9
	36. 溶ける	47.5	44.4	50.0
平均正答率 (%)	47.9		45.4	49.9

表7は「詰まる」、「塞がる」、「解ける」、「溶ける」のような反使役化と脱使役化2つの語彙規則が適用される4つの動詞を使って、被験者に「勝手に」、「ひとりでに」、「難なく」、「苦勞の末」と共起可能かどうかを判断させた結果である。これらの自動詞は、「難なく」、「苦勞の末」のような副詞と共起可能であり、「勝手に」、「ひとりでに」のような主語の自らの性質によって「自発的」に変化することを表す副詞とも共起できる。問題文35の「勝手に傷口が塞（フサ）がった。」と、問題文39の「難なく穴が塞（フサ）がった。」は、「勝手に」と「難なく」それぞれが共起している。「塞ぐ」と「勝手に」が共起する場合、反使役化が適用される。一方、「塞ぐ」が「難なく」と共起する場合、脱使役化が適用される。2つの概念構造を持つ動詞文の平均正答率は、全体が47.9%で、中級者は45.4%、上級者は49.9%となった。この結果は、反使役化文と脱使役化文の各正答率より低い。2つの語彙規則に適用される動詞の容認性の判断は困難であることを示している。

5. 考察

中級者の反使役化文の正答率と脱使役化文の正答率の間に有意差がみられないことから、中級者にとって反使役文と脱使役文に区別はなく、同様のものとして認識していると考えられる。このため、中級者は反使役化と脱使役化の意識を持ってないと思われる。しかし、中級者の反使役化問題文と脱使役化問題文の正答率は50%<sup>10)</sup>を超えるため（表6）、多くの中級者は自他交替動詞を習得することが可能だと考えられる。一方、上級者の反使役化文の正答率と脱使役化文の正答率には統計的有意差があった。上級者の脱使役化文は反使役化文より正答率が高いため、上級者は少なくとも脱使役化を意識し、適切に適用できると言える。中級者は母語の影響は見られないが、上級者は母語の正の転移が見られる。つまり、上級者に関しては仮説が支持されたと言って良いであろう。

<sup>10)</sup> 「分からない」を不正解と見なし誤答として分類したので、実質的に○×式と同等と考える。

反使役化文の正答率は中級者と上級者の間で有意差がないため、中級者のみならず上級者にとっても、反使役化の習得は困難だといえる。また、脱使役化文の正答率は中級者と上級者の間に有意差があり、脱使役化文の上級者の正答率は中級者より高い。このことから、日本語レベルの向上にともなって、脱使役化の適用がより適切に行うことができるようになると考えられる。つまり、日本語レベルが上がると、母語の正の影響が現れてくる可能性がある。

反使役化文の問題10. と問題30. の正答率が、中国語母語話者だけでなく、日本語母語話者においても高くないことは注目に値する。問題10. と問題30. にあらわれる反使役自動詞「縮む」は、「勝手に」と共起できるが、「苦勞の末」のような副詞つくことができない。さらにいえば、他動詞の「縮める」に対応する自動詞には「縮む」と「縮まる」があり、影山（2021）によれば「縮む」は動作主を必要としない反使役化で、「縮まる」は動作主を必要とする脱使役化である。つまり、1つの他動詞が2つの自動詞に対応するため、中国語母語話者だけでなく日本語母語話者にとっても、自動詞「縮む」が反使役化を担当するのか、脱使役化を担当するのかの判断することは困難であると考えられる。

くわえて、2つの語彙規則が適用される動詞に関する問題に対する正答率が比較的低いことも分かった。前田（2018）によると、同一の動詞が反使役化と脱使役化に適用される分析には、2つの可能性がある。一つは、適用する語彙規則ごとに別の動詞としてレキシコンに登録されている、2つの概念構造を持つ動詞を同音異義語として分析する方法である。もう一つは、発話の状況によって適用される語彙規則が異なるという分析である。実際は、どちらの可能性から見ても、中国語母語話者が2つの語彙規則を持つ動詞を習得する際には労力を必要とすることに違いはないだろう。

## 6. まとめと今後の展望

本稿は、アンケート調査を通じて、中級学習者と上級学習者を研究対象の中心にして、中国語母語話者の日本語の学習者が反使役化操作と脱使役化操作を適切に適用できるかどうかを確かめた。中級者は、反使役化と脱使役化という意識がないが、自他交替動詞の習得は可能である。上級者は脱使役化を適切に適用でき、反使役化の習得は脱使役化より難しい。また、中級者は母語の影響は見られないが、上級者は母語の正の転移が見られる。つまり、日本語レベルが上がると、母語の正の影響が現れ、脱使役化を適切に適用できる可能性がある。さらに反使役自動詞と脱使役自動詞のそれぞれの習得難易度を明確にするためには、今後は動詞の活用形とヴォイスなどから習得の全体像を明らかにし、より詳細な議論をする必要がある。

### 参考文献

- アークアカデミ（2015）『はじめての日本語能力試験N4単語 1500』株式会社アクス出版。  
 アークアカデミ（2015）『はじめての日本語能力試験N3単語 2000』株式会社アクス出版。  
 伊藤秀明（2012）「学習者は「対のある自他動詞」をどのように使っているか—中国人日本語学習者の中級から超級に注目して—」『国際日本研究』4 pp. 43-52.  
 加山裕子（2016）「動詞の自他の習得—日本語学習者の自然発話の分析—」『2016 CAJLE Annual Conference Proceedings』 pp. 115-124.  
 影山太郎（1996）『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版。  
 影山太郎（2001）『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店。

- 影山太郎 (2021) 『点と線の言語学 言語類型から見た日本語の本質』 くろしお出版.
- 小林典子・直井恵理子 「相対自・他動詞の習得は可能か—スペイン語話者の場合—」 『筑波大学留学生センター』 11 pp. 83-98.
- 澤田茂保 (1994) 「語彙意味による英語・日本語の自他交替の分析について」 『高岡法科大学紀要』 5 pp. 68-89.
- 申亜敏 (2009) 「中国語結果複合動詞の意味と構造：日本語の複合動詞・英語の結果構文との対照及び類型的視点から」 東京外国語大学 博士論文.
- 丁玲玲 (2013) 「日本語の自他動詞の誤用について—中国人学習者の場合—」 『九州共立大学研究紀要』 3(2) pp. 47-51.
- 前田宏太郎 (2018) 「日本語の自他交替：協調の原理の観点から」 『日本語用論学会 第21回大会発表論文集』 14 pp. 105-112.
- 望月圭子 (2003) 『日本語と中国語における使役起動交替』 研究社出版.
- 望月圭子 (2009) 「日本語・中国語の自動詞構文の対照研究 — ‘-e’ 自動詞と ‘-ar-’ 自動詞との対照をめぐって—」 『汉日理论语言学研究』 pp. 277-284 沈力 赵华敏 编 学苑出版社.
- 李文超 (2008) 「現代中国語と日本語における反使役化と脱使役化」 東北大学国際文化研究科 修士論文.